# スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが

# 世界の哲学および宗教観念に与えた影響

# 現状と将来の展望

### 2014年3月26日

### スワーミー・ヴィヴェーカーナンダと岡倉天心

### 生誕150周年記念セミナー

### スワーミー・ティヤガーナンダ師による講話

### 於・インド大使館

本日は皆様にお会いでき、またスワーミー・メーダサーナンダジ・マハーラージのお招きを頂き、大変光栄です。 今回の私の日本の初訪問に際して、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが岡倉覚三に送った手紙の一節を思い出しました。「私にとって日本は夢である。あまりに美しく、その夢は、見るものの生涯にわたってつきまとう」今年は、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生誕150周年であり、世界中のヴェーダンタセンターのみならず、高校や大学でも記念式典が行われています。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが思想の世界に与えた影響についてお話したいと思います。影響には様々な種類がありますが、その一つは、物質が衝突するときに起こる、物質的影響です。衛星が地球に衝突する可能性はほとんど皆無ですが、実際に起きた場合の危険性と破壊の規模は非常に大きいものがあります。歴史上で物質的な影響を与えた事象には、1945年の長崎と広島への原子爆弾の投下があります。この爆弾による多くの死者と破壊は私達の集合意識に忘れられない記憶を残しました。

もう一つは、哲学や宗教といった、思想の世界に与える影響です。この影響は、洞察力や建設的な行動を促進し、それが人間性に新しい命を吹き込み、人間の意識をより高いレベルへと引き上げます。このような慈悲深い影響を与えた人物は、しばしば称賛され、聖人・預言者だと崇拝されることがあります。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、そのような悟りに達した人々の一人でした。彼の人生と言葉は、彼が生きた時代の世界に永続的な影響を残し、その影響は彼の生誕から150年経った現在でも続いています。

スワーミーが与えた影響を適切に理解するには、過去に遡ってどのように全てが始まったのかを知る必要があります。ラーマクリシュナという男の子は、ベンガルの小村で生まれ育ちました。この子は神の愛の虜となり、不思議な驚くべき経験をし始めました。彼は、コルカタのダクシネーシュワル・カーリー寺院で司祭となった頃から、霊的な実践を熱心に行うようになりました。彼の神秘体験は、古代の聖典に書かれていることが裏付けられただけでなく、それ以上のことをも語りました。そのころ、満開の蓮の花に蜂が群がるように、シュリー・ラーマクリシュナのもとへ、神を真摯に探し求める若者達が集まり始めました。彼らは、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダがそのリーダーを務める、ラーマクリシュナ僧団の第一世代の僧となりました。

スワーミーは青年期のほとんどをインドの放浪に費やしました。彼はなるべく目立たないように努力していましたが、彼ほどの高い能力と精神性を持つ人物が世間の注目から逃れることは難しかったのです。どこにおいても、彼は道徳と精神的価値に基づく生活を送るよう人々に刺激を与えました。スワーミーが1893年シカゴで行われた世界宗教会議への代表となった時、一夜にして彼は世間の評判となりました。彼が持つ精神性の光を隠すことはもはや不可能となったのです。

しかし、大騒ぎというものは長続きしません。スワーミーの場合、西洋世界において彼が起こした初期の熱狂と興奮は数年の間に廃れ、ほとんど消え去ったかのようでした。しかし現在の世界を見ると、そうではないことを私達は知っています。スワーミーが蒔いた精神の種は世界各地で芽吹いています。彼が世界に与えた影響は、すでに世界において浸透しているため、世界の変革に彼がどれほど貢献したかを知るのは、それを鋭く観察しようとする人だけなのです。

スワーミーが、インドが世界の思想へ及ぼす影響を述べた時、彼自身が世界に与える影響を述べていたのかもしれません。

「私達は世界に向けて何度もメッセージを送ったが、徐々に静かにそのメッセージは気づかれなくなった。インド思想の特徴の一つはその静けさと落ち着きである。優しく降る露が目に見えず耳に聞こえないにもかかわらず美しいバラを満開にさせるように、インドは思想の世界で貢献をした。静かに、人に気づかれないにも関らず強力な影響をもち、思想世界に革命をもたらした。しかし、誰もいつそれが起きたのか知らないのである。」

これがまさしくスワーミーが思想世界に与えた影響です。彼のアイルランド人の弟子であるニヴェディタは、100年前に深い予言を残しました。「スワーミーが亡くなった後、彼の業績が忘れられたかのように、長い静寂が始まるだろう。しかし150年から200年後、突然に、彼が西洋世界を大きく変えたことが理解されるだろう。」今日、私達はこの予言が真実であったことを知っています。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダのどのような思想が現代の宗教的意識に深い印象を与えたのでしょう？多くの中で、私は5つ挙げたいと思います。スワーミーの神の精神、精神の革命、宗教間の調和、グローバル化、そして愛国心に関する思想です。それぞれについてこれから述べたいと思います。

## 人間の精神の素晴らしさ

スワーミーは、人間の精神力の素晴らしさを絶えず強調していました。人間が抱える問題は、肉体的、精神的、感情的、理知的な弱さに起因するものであるとし、肉体だけではなく精神力の鍛練も奨励していました。また、人は『鉄の筋肉』と『鋼の精神』を兼ね備えるよう努力すべきだ、とも語っていました。

他の優れた宗教指導者達と同様に、スワーミーは人々に道徳的かつ倫理的に生きることの重要性と、神への深い信仰に満ちた人生を生きるよう説きました。歴史上、道徳的・宗教的勇気の大切さを説き、また優れた模範を示した者は多くいました。しかし、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、一人一人の内なる『アートマン』、すなわち、『真我』、を根源とする精神的勇気の重要性に目を向けるという偉大な功績を残したのです。

『アートマン』を根源とする精神的勇気、という概念は決して知られていなかったわけではありません。『アートマン』の開示こそがヴェーダーンタ哲学の核となる部分です。しかし、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダが、『アートマン』は人間の肉体や心という物理的な層によって深部に閉じ込められているのではなく、人間の力や善良さ、純潔の源となっている、と指摘するまでは長きにわたってアートマンの無常性や、精神解放論ばかりが盛んに論じられてきました。スワーミーが『アートマン』について述べた力強いメッセージは今も私たちに希望を与えてくれます。

「人は、その出自、肉体的な強さ・弱さに関わらず、誰もが偉大かつ善良な人間になれる無限の可能性と力を秘めた『無限の魂』を持っている、ということを自覚すべきだ。魂の一つ一つに、『目覚めよ、目標を遂げるまで立ち止まるな、自身は弱い存在である、という暗示から覚めよ』、と呼びかけようではないか。真の弱者などいないのだ。内なる魂には無限の可能性、能力、知識がある。暗示を振り払い、内在する神を称えよ。彼を拒絶してはならない。覚醒した魂の本質を理解すれば、人は様々な素晴らしいことを達成できるだろう。」

男女間不平等の問題は、フェミニズム運動が盛んになった19世紀以前から長きにわたり存在していました。女性の政治的、経済的な権利や平等な教育機会を確保するのは容易なことではなく、まだ多くの課題が残されています。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、ヴェーダーンタ派哲学の観点から女性達が直面する問題に注目しました。その上でスワーミーは、性差別は男女問わず同じ魂が宿るという根本的真実を否定するものだ、と指摘しました。

『女性の権利に関する問題』について意見を求められたスワーミーは、「私は女性ではない。女性の権利問題について、私に尋ねるあなたは女性だろうか？当事者以外の者が話し合っても意味はない。女性達を信じ、任せるのだ。きっと、自ら解決策を見出すだろう」と述べました。スワーミーの人生から学ぼうとする人達には、「性差別の問題がなくなるまでは、心が休まることはない。アートマンに性別があるだろうか？男女という器を取り除けば、アートマンしか残らない。今こそ、肉体的特徴に基づいた区別をやめなければならないのだ」という、スワーミーの訴えが聞こえていることでしょう。

## 宗教間の調和

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、宗教における必要要素と不必要要素の観念についても偉大な功績を残しました。頻繁に引用されるスワーミーの言葉に次のようなものがあります。

「魂の一つ一つが神聖な存在である。私達は、その可能性を外的・内的要素を制御し、具現化することを目指しているのだ。具現化の方法は、労働や信仰を通して、また、哲学として研究する事等いく通りもある。ひとつの方法を突き詰めて目標を達成しようとするか、複数を組み合わせるかは自由だ。そして、魂の持つ可能性を具現化することこそが宗教の存在意義である。宗教教義や儀式、書物や寺院などは、2次的な意味しか持たない。」

スワーミーのこのような思想は、インドで発達した宗教のみならず、他の宗教からも共感を得ることでしょう。宗教における必要・不必要要素が何であるかを特定しようとする者もいますが、いずれにせよ多くの宗教家が、宗教には不可欠要素とそうでない要素が存在することを認識しています。スワーミーが示した共通認識は、これまで存在しなかった異なる宗教が共通項を見出す土壌を作り出し、宗教間の調和を容易にしているのです。

## 精神的深化

人間と神が個々の存在であるとする二元論的な考え方と、人間と神の真髄は同一であると見る非二元論的な考え方があります。その中間に、人間は、人間より大きな神という存在の一部であるとする見方があります。この問題に関する議論は終わりがないように見えましたが、ヴィヴェーカーナンダが登場し、存在するすべての見解が真実であると指摘しました。「我々は誤りから真実へと旅しているのではなく、真実から真実へと旅している。より低い真実からより高い真実へ」。

ラーマクリシュナの弟子としてその教えを学んだスワーミーは、「愛とは一つになることだ」と指摘しました。最初、神は遠くて怖れ多い存在であるが、心の中で愛が育つと、人間は神へ近くなり、神との偉大な強い結びつきや温かな絆を感じ、自分が神の一部であると感じるようになります。魂と愛はもはや二つの独立した存在ではなくなり、ひとつになる、スワーミーはこう言ったのです。

「すべての宗教は三つの段階を経ている。まず、私たちは神を遠くから眺める。そして神に近づき、神の遍在を信じることで神の中で暮らすようになる。最後に、自分たちが神であることを認識するのだ」

　ヴィヴェーカーナンダは、精神生活に真剣に取り組むものは、他者の見解に関してこれを否定しようなどとせず、また脅威を感じることもなく、ただ神を誠実に愛するべきだ、純粋さと誠意をもって神を愛すれば、いかに違った観点を持っていても、すべての者は同一の大いなる真実に到達するのだ、と語りました。

## グローバリゼーション

科学技術の発展のおかげで、世界は小さくなり、あらゆる社会が多様化したように見えます。また、相互依存も深まっています。　このことは大いなる恵みであり、仏陀の無常観や縁起という思想を補強するものでもあり、ヴェーダーンタの教えにも通じています。

ヴィヴェーカーナンダがよく指摘したように、仏陀はヴェーダーンタの偉大なる教師の一人でした。無常の中心に人間の真の自己、アートマン、精神の真実があります。すべての人間はアートマン、すなわち誕生も死もない、自由で純粋な存在なのです。これを心にとめておけば、グローバリゼーションの恩恵を、身の回りの出来事に煩わされずに享受することができます。

## ナショナリズム

私たちは、ヴィヴェーカーナンダの教えから、世界全体への愛と愛国心は矛盾するものではないと学びました。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、インドではよく「愛国的聖人」と称されます。スワーミーは故郷を熱烈に愛しながら、誰よりも故郷の欠点を深く認識していました。インドへの限りない愛を抱きながら、世界全体にも同様の愛を注ぎました。

スワーミーは、日本人は理想的な愛国心をもっていると考えていました。日本人ほど愛国的で芸術的な民族は他に居ない、日本の偉大さは、日本人が自分に対して誠実であることと、国を愛していることから生まれるのだ、とインドの同胞に語りました。

「日本人の持つ社会的道徳と政治的道徳を身につければ、彼らのように偉大になれる。日本人は国のためにすべてを捧げる覚悟をもって、偉大な国民となったのだ」

日本には、守るべき素晴らしい遺産と伝統があります。皆さんには力と真実に満ちたスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの教えを深く学んで欲しいと思います。私たちがより良き人間となり、世界がより良い世界になるよう、スワーミーの教えが我々を導いて下さいますように。